

# 研究ノート

## 日本におけるアンプティサッカーの変遷と世界の動向

宮 本 彩

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

### Progress of Amputee Soccer in Japan and the World

Aya MIYAMOTO

(Department of International Tourism, Nagasaki International University)

#### Abstract

This study summarizes the progress of amputee soccer in Japan and the World. As the progress is reported, this study collected information on efforts to grow popularity and improve competitiveness. Information on Japanese amputee soccer is based on the homepages of related organizations, pamphlets published in the past, and newspaper articles, etc. The international ones were gathered from related organizations' homepages, books, and academic papers, etc. Amputee soccer is becoming the popular as a casual disabled sport because it does not use expensive dedicated equipment. It is inferred that the spread of amputee soccer will further progress globally in the future.

#### Key words

Amputee soccer, Disabled sports, Progress

#### 要 旨

本稿は、日本におけるアンプティサッカーの競技普及ならびに競技力向上に向けた取り組みの変遷をまとめるとともに、世界の動向を概説するものである。日本におけるアンプティサッカーの変遷は、各関係機関のホームページや過去に発行されたパンフレット、新聞等の掲載記事の情報を基に、①特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会、②国内のアンプティサッカー大会、③アンプティサッカー日本代表のワールドカップに向けた取り組みについてまとめた。世界の動向については、各関係機関のホームページ、書籍および学術論文を基に、①アンプティサッカーの歴史、②最近の競技発展の動き、③学術研究についてまとめた。アンプティサッカーは、高価な専用器具を用いないため、気軽に楽しめるスポーツとして人気が高まっており、今後も世界的な競技普及が進むと推察される。

#### キーワード

アンプティサッカー、障害者スポーツ、変遷

#### はじめに

現在、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックが追い風となり、障害者スポーツへの関心が高まっている。全国各地でパラリンピック種目を中心に体験会やイベントが行われ、障害者スポーツの理解促進に向けた取り組

みが推進されている。また、リオパラリンピック以降は、競技力向上への期待も高く、日本パラリンピック委員会主催の「選手発掘事業」が行われるなど、強化に向けた取り組みが進められている<sup>1)</sup>。

筆者は、アンプティサッカー競技者との出会

いをきっかけに、アンプティサッカーの競技力向上に資する研究ならびに支援とともに、競技普及に携わっている。活動の中で、アンプティサッカーを取り巻く社会環境の変化や変革を実感している。

そこで、本稿では日本におけるアンプティサッカーの競技普及ならびに競技力向上に向けた取り組みの変遷をまとめるとともに、世界の動向を概説する。

## 1. アンプティサッカーとは

アンプティサッカーは、上肢あるいは下肢に切断や麻痺などの障害のある方のために設計されたサッカーの1つである。試合は1チーム7人制で、ピッチサイズは11人制サッカーの約3分の2の広さ(国際基準60m×40m)で行われる。ゴールキーパーは上肢に障害のある競技者が、フィールドプレーヤーは下肢に障害のある競技者が担当する。フィールドプレーヤーは、義足を着用せず、医療・リハビリテーションや日常生活においてよく使用されているロフトランドクラッチ(以下、クラッチとする)を用いてプレーする。高価な専用器具を用いないため、気軽に楽しめるスポーツとして、ヨーロッパを中心に人気が高まっている<sup>2,3)</sup>。

競技規則については、基本的には11人制サッカーに準じるものの、障害等を考慮した変更がなされている。主なものを下記に示す(1)~(7)である。

- (1) ボールがタッチラインを割った場合は、キックラインからゲームを再開する。
- (2) オフサイドのルールは適用しない。
- (3) ゲーム中の選手の交代は何回でも行うことができる。また、一度フィールドを出たプレーヤーも再度ゲームに参加することができる。
- (4) 切断ならびに障害側の四肢を使用することは認められない。
- (5) フィールドプレーヤーは移動のためにクラッチを使用することができるが、クラッチによるボールの操作は認められない。故意に

触れた場合はハンドとなる。

- (6) フィールドプレーヤーは転倒した状態ならびにクラッチが手から離れた状態でボールを蹴ることが認められない。
- (7) 国際大会での試合時間は前後半25分の計50分間で行われ、前後半の間に10分間のハーフタイムが設けられる。

アンプティサッカーは、11人制サッカーに比べてプレーヤー数が少ないため、1対1で攻防する場面が多くみられる。また、ピッチサイズがコンパクトなうえに、オフサイドのルールが適用されていないことから、攻守の切り換えやゲームの展開が速いという特徴がみられる。これら特徴は、競技者のみならず、観戦者からみたアンプティサッカーの魅力であると感じる。

## 2. 日本におけるアンプティサッカーの変遷

特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会のホームページ<sup>2)</sup> および公益財団法人日本サッカー協会ホームページ<sup>3)</sup>でのニュースリリースに加え、アンプティサッカーの国内大会にて配布されたパンフレット<sup>4-6)</sup>やアンプティサッカーに関連する新聞等の掲載記事<sup>9-15)</sup>を基に日本におけるアンプティサッカーの変遷を記す。

### ① 特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会

2009年12月に任意団体の日本アンプティサッカー協会が設立された。協会の設立のきっかけは、日系3世のブラジル人であるエンヒッキ・松茂良・ジマス氏が来日し、アンプティサッカーが日本に紹介されたことである。2010年から、本格的に国内での競技普及活動が開始され、東京に日本初のアンプティサッカークラブとなるFC ガサルスができた。これを契機に、全国でアンプティサッカークラブが立ち上がった。2018年現在、9チームが活動し、96名が選手登録をしている。表1に各チームの紹介をまとめた<sup>2)</sup>。

表1 日本国内のアンプティサッカーチーム<sup>2)</sup>

<p><b>TSA FC (静岡県)</b> 2010年設立 紹介文：他のチームと比べ、若干平均年齢は高めではありますが、「サッカーを愛する心」を持ち続ける「負けず嫌い」の集団です。 個々の「経験」「知識」「技術」を発揮し、自分の役割を果たすべく、神奈川・静岡を活動拠点に、(歳を忘れて)頑張っています。</p> 	<p><b>FC ALVORADA (東京都)</b> 2013年設立 紹介文：チーム名の由来はポルトガル語で「夜明け」。事故や病気などで手や足に障害を負った人がもう一度スポーツに打ち込む姿を皆さまに見ていただくことで、何か心の奥にある希望や勇気に少しでも変化をもたらすことが出来ればと願いを込め、チームを発足しました。誰もが垣根なくスポーツを楽しめる環境づくりを目指し、活動しています。</p> 
<p><b>FC九州バイラオール (大分県)</b> 2011年設立 紹介文：大分県を拠点とした九州初のアンプティサッカーチームです。2011年7月にチームを結成し、アンプティサッカー日本選手権優勝3回、レオピン杯 Copa Amputee 優勝2回の成績を収めることができました。普段は大分県、福岡県を中心に定期的に練習を行い、また、アンプティサッカーの普及活動のため講演会や体験会なども積極的に行っています。今後もアンプティサッカーの普及活動はもちろん、バイラオールから日本代表に多くの選手が選ばれるようにチームとして更にレベルアップしていきたいと思っています。</p> 	<p><b>A-pfeile 広島 AFC (広島県)</b> 2013年設立 紹介文：中四国初のアンプティサッカーチーム「A-pfeile 広島 AFC」です。現在広島県の選手を中心に山口県、岡山県からも一緒にサッカーをするために集まってきています。我々の活動の目的は、身体的にも精神的にも落ち込んでいるかも知れない方々を太陽の下に呼び出すことです。「障害者スポーツは最高の社会復帰の手段である」とある選手が言っていました。スポーツの力は時に我々の想像をはるかに超える結果をもたらすことがあります。そんな力を味わって貰いたいですし、もっともっと表に出てきて、皆と一緒に笑って欲しいと思っています。かつての自分を超える、今の自分を超える、超えようとする人たちを A-pfeile 広島は待っています。一緒にボールを蹴りましょう、笑いましょう、感動しましょう、そして自分を超えましょう!!我々はそのお手伝いをします、全力で。</p> 
<p><b>関西 Sete Estrelas (大阪府)</b> 2012年設立 紹介文：関西を中心に、岐阜や三重、静岡などの東海地方でも練習や講演会なども行っています。2012年1月29日に結成し、選手・スタッフも人数が増えてきました。小学生の選手も増えて勢いを増して行きます!! アンプティサッカーを楽しむ、自分のやれる事を一生懸命に全力でする事をモットーに、チーム一丸となって全力のプレーをお見せします。ボールを全力で追いかける、ボールを取られても取り返す、体を張ってゴールを守る、体を投げ出して点を取りに行くなど、泥臭く、戦う姿を皆さんにお見せ出来るよう日々の活動に取り組みます。</p> 	<p><b>アシルスフィーダ北海道 AFC (北海道)</b> 2013年設立 紹介文：アシルはアイヌの言葉で「新しい」を、フィーダはイタリア語で「挑戦」を意味している。障害が理由で、これまでスポーツを諦めていた、また、サッカーを諦めていたというような、可能性のある選手たちの希望となれるよう活動しています。また、頑張る選手たちを支援しています。チームの活動には、小学生から社会人まで幅広い方々が参加していて、一緒になってアンプティサッカーを楽しんでいます。今後も、活動の輪を広めていくために、チーム名にもあるとおり、新しい「挑戦」に取り組み、頑張る選手たちをしっかりサポートしていきます!</p> 

**AFC BumbleBee 千葉（千葉県）**

2014年設立

紹介文：バンブルビーはマルハナバチのことで、飛ぶには不向きな身体から、不可能を可能にする動物との逸話がある。

私たちは千葉県を拠点として、地域の方々と共に健常者と障害者の垣根の無いサッカーを楽しんでいます。チームでは、女性選手や小学生の選手も一緒にプレーしながら健常者も障害者も一緒になって楽しくボールを追いかけています。ほとんどの選手がサッカー経験のない中で、アンパティサッカーを日々一生懸命練習しています。

**ガネーシャ静岡 AFC（静岡県）**

2015年設立

紹介文：ガネーシャは、あらゆる障害を取り去り、成功に導く守護神。

「サッカーの盛んな静岡にもアンパティサッカーのチームを作りたい」という思いから活動をはじめ、2015年9月にチーム名を決め設立、本格的に活動を始めました。

現在、静岡の選手を中心に、愛知・岐阜の選手にも参加してもらい、まずは選手が楽しんで参加できるチーム作りと切断者が様々な形で関われる場所となることを目指し活動をしています。

**FC 1 TOP（埼玉県）**

2016年設立

紹介文：北関東以北を主体とするチームです。「楽しむ」を信条に、全員で笑いの絶えないチーム作りを心掛けています。

スタッフならびに関係者が選手の3倍もいる面白いチームです。未だメンバーがそろわず、大会へは合同チームとして出場しています。

応援してくれる人々や初めてアンパティサッカーをみる人にも楽しみを与え、この競技の魅力を引き出せたらと思っています。



2013年4月に法人格を取得し、特定非営利活動法人日本アンパティサッカー協会として本格的な活動が開始された。協会のミッションとして、「広くサッカーを通じて、障害の有無を超え充実した共生社会の実現をめざす」と掲げている。そして、下記の普及、強化および組織のビジョンを挙げている<sup>2)</sup>。

**【普及】**

アンパティサッカーの普及に努め、健常者への理解推進、切断障害者への啓蒙を行い、社会に根付いたものとなることで、誰でも、いつでも、どこでもサッカーを楽しめる環境を創りあげる。

**【強化】**

アンパティサッカーの強化に努め、日本代表が世界で活躍することで、人々に勇気と希望と感動を与える。

**【組織】**

健全な組織の構築に努め、社会的責任を果たしていくことで、アンパティサッカーの価値を向上する。



左図：協会エンブレム

2016年4月1日に一般社団法人日本障害者サッカー連盟が設立されたことは、日本アンパティサッカー協会にとっても、大きな変革と言えるのではないだろうか。これまで個々に活動してきた障害者サッカー7競技団体（特定非営利活動法人日本知的障害者サッカー連盟，一般社団法人日本ろう者サッカー協会，一般社団法人日本CPサッカー協会，特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会，特定非営利活動法人日本アンパティサッカー協会，一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会，特定非営利活動法人日本ソーシャルフットボール協会）が加

盟し、公益財団法人日本サッカー協会の傘下となった<sup>2,3,9)</sup>。

日本障害者サッカー連盟の会長には北澤豪氏が就任した。北澤氏は、各障害者サッカーの大会への観戦だけでなく、各地で開催されている体験会等にも積極的に参加し、競技の普及に尽力されている。パラスポーツマガジン<sup>9)</sup>の取材に対して「障害者と健常者のサッカーに対する思い、姿勢に何ら違いはない。そしてお互いの強みをそれぞれのサッカーに取り込めば、日本のサッカーはさらに強くなるし、おもしろくなる」と語っている。また、Jリーグクラブとの連携への期待とともに、障害者サッカーの7競技団体自らが社会に出ていく必要性を指摘している。そして、北澤氏は「まず“知ってもらう”ことから始めないといけない。スポーツの力は偉大ですから、社会に活かしていかないと。僕は日本障害者サッカー連盟の会長として、全国のサッカー協会で折あるたびに障害者スポーツのことを話しています。ユニバーサル社会を実現できたら、もう障害があるなしの次元じゃなくなっていくんですよ。みんな高齢者になるわけだし。僕は障害者サッカーが世の中に普通にあれば、自分がどんな状態になっても、たとえばこの先に障害を負ったとしてもサッカーができるんだって思えました。ああ、一生サッカーできるなって安心しました。」と語っている。

競技の普及ならびに発展のためには、多様な視点からの評価を受け入れ、多様な価値を創造していく必要があるのかもしれない。日本サッカー協会の傘下として日本障害者サッカー連盟が設立され、多くの交流を生み出す仕組みができたことから、今後の取り組みの中で、多様な価値の創造と共有がなされることに期待したい。

## ② 国内のアンプティサッカー大会

日本アンプティサッカー協会が主催する大会として、現在、日本アンプティサッカー選手権とレオピン杯Copa Amputee大会の2大会が開催されている。日本アンプティサッカー選手権

は、2011年に第1回大会が開催されて以降、毎年開かれている。当初は、参加チーム数がわずか3チーム、競技者数が約30名であった。その後、第4回大会では6チーム、第6回大会では9チームと増加し、競技者の入れ替わりもありながら、現在では約90名が参加している。過去7大会とも、秋季に神奈川県川崎市にて行われている<sup>2,5,8,9)</sup>。



上図：過去の大会ポスター

一方、レオピン杯Copa Amputee大会は、アンプティサッカーワールドカップ2012・ロシア大会での日本代表の惨敗を契機に2014年に始まった。この大会は、春季に大阪府にて行われている<sup>2,4,6,8)</sup>。全日本アンプティサッカー選手権とともに、各チームが日本一をかけて真っ向勝負を繰り広げている。

日本アンプティサッカー協会以外が主催する大会としては、2016年から広島県にて西日本アダプテッドスポーツフェスティバルのプログラムの1つとしてアンプティサッカーの試合が行われている。この大会では、健常者もクラッチを用いてアンプティサッカーに参加することができる。同様に、アンプティサッカー選手と健常者が一緒にプレーする“4 vs 4 Amputee Sete CUP”が2017年3月に大阪府にて開催<sup>12)</sup>されるなど、競技のすそ野を広げる取り組みも行われている。

### ③ アンプティサッカー日本代表のワールドカップに向けた取り組み

アンプティサッカー日本代表選手たちによる世界への挑戦は、2010年のワールドカップ・アルゼンチン大会への初出場から始まった。ただ、当時は国内の競技人口が非常に少なく、プレーヤー10名での参戦であった。アルゼンチン大会での戦績は、5戦5敗で、参加国16か国のうちで15位であった<sup>2)</sup>。続く2012年のロシア大会は、国内競技者約40名から代表選手（プレーヤー12名）を選考して臨んだ。しかしながら、結果は6戦1分5敗で、参加国12か国のうちで最下位であった。この大会での惨敗を機に、国内大会でも「守備重視」の戦術をとるチームが増えた。守備重視の戦術とは、チームのエース級をあえて後ろのラインに配置するものである。3度目の挑戦となる2014年のメキシコ大会では、堅守が功を奏し、初戦でワールドカップ初勝利を掴むと、そのまま予選リーグを3勝0敗で突破し、決勝トーナメントへの出場を果たした。惜しくも決勝トーナメント1回戦で敗れたものの、参

加国24か国のうち11位という結果をおさめた<sup>10)</sup>。また、メキシコ大会に挑むにあたり、日本代表候補合宿を開催するなど、前回大会以上に厳選な選考と競技力強化に向けた取り組みが行われた。このことが、好成績を生んだと高く評価され、この大会以降、日本代表選手に対する強化策が議論され、取り組みへとつながられている。

前メキシコ大会から、さらなる飛躍をめざした2016年のワールドカップは、開催予定地であったトルコの情勢不安等により、中止となった。この事態を受け、2018年の大会に向けた長期的な競技力強化の取り組みが進められた。2017年には初のヨーロッパ遠征が実施された。若手の人材発掘を主な目的として、第6回 Amp Futbol Cup 2017・ポーランド大会にアジアチームとして初参戦を果たした<sup>2,7)</sup>。この大会へは日本選抜チームとして高校生2名を含むプレーヤー12名とスタッフ7名が派遣された。大会戦績は参加国6か国のうち3位（2勝2敗）であった。また、大会最優秀選手に日本の若手選手（萱島比呂選手・FC九州バイラオール所属）が選出される快挙を成し遂げた。このヨーロッパ遠征と同時期に、国内でも強化合宿が行われ、全国の9チームから選出された21名が、戦術トレーニングならびにゲーム形式での実践トレーニングを行った<sup>2)</sup>。

2017年12月に2018ワールドカップ・メキシコ大会への参加が正式決定し、発展著しい世界のアンプティサッカーの動向に対処すべく、協会内に「強化委員会」が発足した<sup>2)</sup>。委員会発足の目的は、当面はワールドカップに向けた日本代表チームの強化、万全のサポート体制を最大の目的としつつ、それと並行して長期的な指導者の育成、国内チームの強化に努め、日本全体の競技レベルの底上げ、向上を図るとされている<sup>2)</sup>。構成メンバーは、過去のワールドカップで日本代表監督を務められてきた杉野氏、大会および強化合宿等のコーディネートをされてきた協会理事の関根氏に加え、過去のワールドカップ出場経験を持つ選手2名（新井氏、野間口氏）

とコーチ兼トレーナーとしてワールドカップ等の世界大会に帯同されてきた坂光氏と、実働的な布陣となっている。さらに2018年5月にはアドバイザーとして日本サッカー協会公認B級ライセンスを保有する若手指導者2名（矢島卓郎氏、前鼻啓史氏）が就任した<sup>2)</sup>。外部からアドバイザーを迎えるのは初の試みであり、さらなる競技力強化に向けて取り組みが進められた。2018ワールドカップ・メキシコ大会に向けた代表選手選考会が6月に行われ、7月に日本代表選手が正式発表された<sup>2)</sup>。過去のワールドカップ出場経験者に加えて、初選出となる10代の選手3名が選ばれた。7月中旬と9月上旬の2度にわたり代表合宿が行われ、「ワールドカップ・ベスト4進出」を目標に掲げ、準備が進められた<sup>2)</sup>。

2018年10月27日に開幕したワールドカップ・メキシコ大会では、日本代表チームは予選Cグループリーグでコスタリカ、コロンビア、ポーランドと対戦し、2勝1敗の2位で決勝トーナメント進出を決めた。決勝トーナメント1回戦で、大会開催国であるメキシコに惜しくも敗戦し、目標としていたベスト4には届かなかった。その後、9-16位の順位決定戦に臨み、1回戦のコロンビア戦と2回戦のケニア戦に勝利し、初のトップ10入りを果たした。9・10位をかけたハイチ戦では、前半に先制点を決められ、追いかける展開となり、何とか1点を返したものの、試合終了間際に追加点を決められ、敗れた。これまでの大会とは異なり、今大会ではベスト8以下のチーム同士も順位決定戦を行い、最終順位を決定したことから、勝ち取った価値ある10位と言える。それと同時に、世界の競技レベルの高さを突き付けられる結果となった。日本代表として参加した選手たちからは、海外選手のスピードの速さと強靱なスタミナ、ボール操作などの技術の高さを痛感し、日本のレベルアップの必要性を再認識させられたという意見が聞かれた。杉野監督は大会総括として「競技レベル全体が上がっておりベスト8の壁が高いこと、

大差が付く試合が以前より少なくなっていること、背後からのチャージにはより厳しいジャッジが下されること、日本の戦い方が研究されていること等が印象的な大会でした。高地、長い天然芝、デコボコでぬかるんだグラウンド、暗いナイトゲームに不可解な審判など、日本とは異なる環境に苦しみました。私たちはこれらを経て、得た経験を思い出にすることなく、日本アンプティサッカーの血肉とし4年後の大会はもちろん、10年後や20年後の中長期を見据えた強化の起点となるよう取り組む次第です。」と語っている<sup>2)</sup>。また、ワールドカップ・メキシコ大会でキャプテンを務めた古城選手は「今大会、日本アンプティサッカーが着実に力をつけ、成長していることが実感できたW杯でしたが、それ以上に各国代表の成長を目の当たりにして、やるべき事、やれる事の可能性を示してもらえたと個人的に感じています。個の力、特にフィジカル面の世界との差はかなり大きいと感じましたが、能力を高められる伸び代がまだまだあるとポジティブに捉えています。前回大会の11位から一つ順位を上げることの難しさを痛感しました。毎試合ギリギリの戦いで、一つも楽な試合はありませんでしたが、様々なアクシデントを乗り越えて成長できた財産を代表選手達が各々のチームへ持ち帰り、次の4年後、強く逞しい日本代表を作り上げる一人になっていくと確信しています。」と語っている<sup>2)</sup>。



上図：2018アンプティサッカーワールドカップ  
日本代表チーム

### 3. 世界におけるアンプティサッカーの動向

#### ① アンプティサッカーの歴史

The History of 'Modrn' Amputee Football<sup>16)</sup>を基に、アンプティサッカーの歴史についてみていく。

アンプティサッカーは、1980年にアメリカ人の切断障害者だった Don Benett 氏が、偶然、ボールを蹴ったことから生まれたとされている。その後、切断者の新たなチームスポーツとして、アメリカ・シアトルで広まった。Bill Barry 氏が Amputee Soccer International を設立し、世界規模でアンプティサッカーの普及と発展に取り組み、その結果として、小規模ながら世界大会が開催されていくこととなった。なお、1987年までは11人制サッカーのルールが採用されていたが、その後、ルール等の検討が重ねられ、1998年に International Amputee Football Federation が設立されるとともに7人制として正式なルールが構築された。その後、2005年に World Amputee Football Federation が発足し、同年のブラジル大会ではアフリカやトルコが初参加を果たし、競技レベルが大幅に向上した<sup>16)</sup>。

#### ② 最近の競技発展の動き

2005年以降、さらに世界各地で競技普及が進み、現在、World Amputee Football Federation には46か国が加盟している<sup>17)</sup>。2017年10月には European Amputee Football Federation (EAFF) が主催し、European Amputee Football Championship が初めて行われた。この大会はトルコのイスタンブールで開催され、12か国（トルコ、スペイン、ドイツ、ジョージア、ポーランド、イタリア、フランス、ベルギー、イギリス、ロシア、アイルランド、ギリシャ）が参加した。決勝戦は、トルコ対イギリス戦となり、トルコがイギリスを2対1で破り、初のタイトルを獲得した。なお、この決勝戦には4万人を越す観客がスタジアムに訪れ、両チームに声援を送った<sup>17)</sup>。

今年は4年ぶりにワールドカップがメキシコ

にて開催された（2018年10月24日～11月5日）。24か国の代表チームが集まり、世界一に向けた戦いが行われた。予選グループリーグとして、各グループの4か国が総当たり戦を行い、上位2チームならびに各グループ3位チームの上位4チームがベスト16として決勝トーナメントに進出し、順位を決定した。優勝国は、PK戦までもつれた決勝戦を制したアンゴラが、アフリカ勢として初めて優勝を飾った。準優勝は国内にアンプティサッカーのプロリーグを有するトルコであった。上位に進出したチームはいずれも、個々の選手が高い体力および技術を持ち合わせているのに加え、チームとしての技術と戦術が構築されている印象であった。大会会場にて優勝したアンゴラチームの選手に日々のトレーニング内容を聞いたところ、「チーム練習の前に浜辺でのランニングを1時間以上している」と教えてくれた。50分間のハードな試合をもちもしい強靱なスタミナは日々のトレーニングにより培われていると言える。また、準優勝のトルコチームは国内にプロリーグを有しており、選手層の厚さと技術および戦術の高さがうかがえた。昨年の European Amputee Football



上図：2018アンプティサッカーワールドカップ大会結果

Championshipでの活躍を機に、強豪国の1つに挙げられるようになったイギリスは、ベスト4を逃し、6位となったものの、ワールドカップに向けて国内外で代表合宿を数多く開催するなど、競技力向上に力を入れている<sup>18)</sup>。

ワールドカップ次大会に向けた準備は既に進んでいる。Word Amputee Football Federationの理事会にて、ポーランドとコスタリカが開催地に名乗りを上げており、決定に向けた手順が確認されている<sup>17)</sup>。今後、アジア大会などの新たな国際大会の開催等も検討されており、さらに競技の普及と発展が進むと推察される。

### ③ 学術研究

アンプティサッカーに関する学術的な研究は、国内外ともに未だ数少ないのが現状である。2006年の栄養調査<sup>19)</sup>を皮切りに、これまでの研究では競技者の身体能力・体力に焦点を当てたものが主である<sup>20-24)</sup>。2017年以降は、実際にアンプティサッカーの試合中の走行距離や心拍数を計測し、それを基にした競技パフォーマンスの評価<sup>25, 26)</sup>が行われているほか、戦術評価に関する研究<sup>27)</sup>がなされてきている。これら先行研究において、アンプティサッカーではスプリント走を含む高強度でのランニングが重要であることが指摘されている<sup>20-26)</sup>。これは、11人制サッカーと同様に、得点やボールの争奪など試合の勝敗に関与する場面で速く走ることが有効となるためである。

アンプティサッカーのパフォーマンス構造は、多くの球技スポーツに共通した「戦術、技術、体力の階層構造」をしており、現時点で学術的に明らかにされていることは、その中のごく一部といえる。特に個人技能や技術に関する研究は、課題も多い。例えば、健常者を対象に実施されてきた測定方法や機材を、障害のある競技者に適用できないということがよくある。また、障害のある競技者の体力・運動能力は、障害の程度や状態によって大きく異なる<sup>28)</sup>。そのため、得られたデータに関する妥当性の検証や障害特

性の配慮が求められるなど、評価の標準化を図ることは容易なことではない。先述したとおり、アンプティサッカーのパフォーマンス構造は階層構造をしているため、体力の相違が技術にも大きく影響することになる。さらなる学術研究での発展のためには、専門領域や分野を横断した取り組みが必要となるだろう。

### 結 び に

本稿において、日本におけるアンプティサッカーの競技普及ならびに競技力向上に向けた取り組みの変遷をまとめるとともに、世界の動向を概説してきた。

アンプティサッカーは、考案から40年弱と日が浅く、国内外ともに発展途上といえる。ただし、2017年に開催された European Amputee Football Championshipにおいて4万人の観客が熱狂した様子を見ると、アンプティサッカーがスポーツコンテンツとして優れていることが推察される。湯本ら<sup>29)</sup>は、“スポーツコンテンツはスポーツ本来の魅力である試合を構成する「見どころ」「展開」と、「背景的性質」を含む情報（スポーツに対する視点を示すことで万人の興味をスポーツに引きつける）、「知識的性質」を含む情報（スポーツに対する理解を深める）を組み合わせることで多様化する”と述べている。また、スポーツコンテンツの充実の要因として「見どころ」を豊富に有していることを挙げている<sup>29)</sup>。アンプティサッカーには、27個の「見どころ」を構成する要素のうち多くの要素が含まれていると考えられる。表2に湯本ら<sup>29)</sup>が示した「見どころ」を構成する要素を示すとともに、アンプティサッカーが該当すると思われる要素にチェックを付けた。アンプティサッカーの競技紹介においても「スピード感や接触プレーの激しさなど非常にダイナミックな競技である」と記載されており<sup>2, 5, 7)</sup>、競技の魅力ともいえるだろう。今後、さらに世界的に競技普及が進むことが期待できる。

一方、学術研究の発展には課題が多い。現在、

表2 「見どころ」を構成する要素<sup>29)</sup>

- ・疾走感がある (○)
- ・躍動感がある (○)
- ・渾身の一撃を放つ感じがある (○)
- ・力強さがある (○)
- ・滑走感がある
- ・宙に投げ出される感じがある
- ・寸分違わぬ正確さ
- ・美しさがある
- ・華麗さがある
- ・機敏感がある (○)
- ・連携がある (○)
- ・選手ごとの持ち味が多様 (○)
- ・次の選手に託せる
- ・攻守交替の周期にリズムがある (○)
- ・相手の攻撃をしのぐことで自分の攻撃になる (○)
- ・相手の影響を受ける (○)
- ・難易度によって得点差がある
- ・駆け引きが重要 (○)
- ・一対一の勝負がある (○)
- ・肉体の接触がある (○)
- ・ラフプレーがある (○)
- ・空中での競合いがある (○)
- ・スピード的な競合いがある (○)
- ・優勢と劣勢が目に見える (○)
- ・ルールが複雑
- ・試合に時間制限がある (○)
- ・記録を競う

※アンブレティサッカーに該当すると思われる要素に (○) 印を記載した。

論文および研究グループは数えられるほどしかなく、基礎的なデータの蓄積が始められたばかりといえる。湯本ら<sup>29)</sup>が「見どころ」「展開」に組み合わせるものとして挙げた付加情報(背景の性質を含む情報ならびに知識的性質を含む情報)の充実には、学術研究の発展も重要といえる。本稿は、アンブレティサッカーのスポーツコンテンツの充実の一助となる付加情報を提供するものと考えている。今後、さらなる競技普及と競技力の向上に向けて学術研究を進めていく必要があるといえるだろう。

## 謝 辞

本稿は、平成30年度 長崎国際大学 学長裁量経費(科研費チャレンジ)の助成を受けて行われた。

日々の研究遂行にあたり、特定非営利活動法人日本アンブレティサッカー協会をはじめ、アンブレティサッカー関係者の皆様に多大なるご協力をいただいている。ここに改めて感謝の意を表する。

## 参考文献

- 1) 日本パラリンピック委員会ホームページ. 選手発掘事業 <<http://www.jsad.or.jp/paralympic/hakkutsu/index.htm>> [2018年12月17日閲覧]
- 2) 日本アンブレティサッカー協会ホームページ. <<http://j-afa.jp/>> [2018年12月17日閲覧]
- 3) 公益財団法人日本サッカー協会ホームページ. <[https://www.jfa.jp/football\\_family/disability/amputee\\_football.html](https://www.jfa.jp/football_family/disability/amputee_football.html)> [2018年9月24日閲覧]
- 4) 第3回レオピン杯 Copa Amputee 切断障害者サッカー大会パンフレット (2016)
- 5) 第6回日本アンブレティサッカー選手権大会2016大会パンフレット (2016)
- 6) 第4回レオピン杯 Copa Amputee 切断障害者サッカー大会パンフレット (2017)
- 7) 第7回日本アンブレティサッカー選手権大会2017大会パンフレット (2017)
- 8) 第5回レオピン杯 Copa Amputee 切断障害者サッカー大会パンフレット (2018)
- 9) パラスポーツマガジン (2017年12月29日発行) JIFFの実現で、日本のサッカーはもっと強くなる. 取材・文/伊集院尚子. PP: 42-45.
- 10) THE PAGE (2015年11月20日) アンブレティサッカー5年日本の戦術を変えた惨敗, W杯快進撃へ(上)(下).
- 11) 西日本新聞 (2017年1月13日)「足をなくしてよかった」選手の言葉に込められた魅力片脚, 片腕のアンブレティサッカー個人技, 過酷さ, 政界との戦いも.
- 12) サッカーダイジェスト Web (2017年4月1日) アンブレティサッカーが新たな試み. 健常者も一緒にプレーする大会を開催.
- 13) サッカーダイジェスト Web (2017年11月24日) 選手に夢と自信をもたらす競技! 第7回日本アンブレティサッカー選手権大会が開催!
- 14) パラスポーツマガジン (2017年12月29日発行) 見てくれ!これがアンブレティサッカーだ!! 取材・文/宮崎恵理. PP: 48-51.

- 15) 中外製薬ホームページ. もうひとつのスポーツ「アンプティサッカー」〈[https://www.chugai-pharm.co.jp/csr/parasports/another\\_sport\\_03.html](https://www.chugai-pharm.co.jp/csr/parasports/another_sport_03.html)〉 [2018年9月24日閲覧]
- 16) Jim Frère. (2007) 'The History of 'Modrn' Amputee Football.' Amputee Sports for Victims of Terrorism. Centre of Excellence Defence Against Terrorism, Ankara, Turkey (Ed.). IOS Press, PP. 5-13.
- 17) World Amputee Football Federation Homepage. 〈<http://www.worldamputeefootball.com/>〉 [2018年12月18日閲覧]
- 18) The England Amputee Football Association Facebookpage. 〈<https://www.facebook.com/TheEAFA/>〉 [2018年12月18日閲覧]
- 19) Innocencio da SGA., Gonçalves RB., de Abreu SE. (2006) 'Nutritional profile of the Brazilian Amputee Soccer Team during the precompetition period for the world championship.' *Nutrition* 22(10), PP.989-95.
- 20) Özkan A., Kayhan G., Köklü Y., et al. (2012) 'The relationship between body composition, anaerobic performance and sprint ability of amputee soccer players.' *Journal of Human Kinetics* 35, PP.141-146.
- 21) Simim MAM., da Silva BV., Marocolo M Jr., et al. (2013) 'Anthropometric profile and physical performance characteristic of the Brazilian amputee football (soccer) team.' *Motriz: Revista de Educação Física* 19, PP.641-648.
- 22) Wiczorek M, Wiliński W, Struzik A, Rokita A. (2015) 'Hand grip strength Vs. Sprint effectiveness in amputee soccer players.' *Journal of Human Kinetics* 48, PP.133-139.
- 23) Simim MAM., Bradley PS., da Silva BV., et al. (2016) 'The quantification of game-induced muscle fatigue in amputee soccer players.' *Journal of Sports Medicine and Physical Fitness* 57(6), PP.766-772.
- 24) Miyamoto A., Maehana H., Yanagiya T. (2018) 'Characteristics of anaerobic performance in Japanese amputee soccer players.' *Juntendo Medical Journal* 64 (Suppl 1), PP.1-5.
- 25) Simim MAM., da Mota GR., Marocolo M., et al. (2018) 'The Demands of Amputee Soccer Impair Muscular Endurance and Power Indices But Not Match Physical Performance.' *Adapted Physical Activity Quarterly* 35(1), PP.76-92.
- 26) Maehana H., Miyamoto A, Koshiyama K., et al. (2018) 'Profile of match performance and heart rate response in Japanese amputee soccer.' *Journal of Sports Medicine and Physical Fitness* 58(6), PP.816-824.
- 27) Maehana H., Miyamoto A, Kiuchi M., et al. (2018) 'The Comparison of Attacking Aspects between the International Level and Domestic Level in Amputee Soccer Tournament.' *International Journal of Sport and Health Science* 16, PP.1-9.
- 28) 矢部京之助, 草野勝彦, 中田英雄. (2004) 『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』第1章 アダプテッド・スポーツの科学的支援, PP. 5-10. 市村出版.
- 29) 湯本徹朗, 工藤芳彰, 古屋繁. (2017) スポーツにおける見どころとコンテンツの関係. デザイン学研究. 研究発表大会概要集54, PP. 168-169.

\* 英語文献の和訳は著者によるものである。